

2019 年 3 月 18 日

TLP 中国語 2018 年度台湾研修報告書日誌

2019 年 3 月 10 日から 3 月 17 日まで計 8 日間に渡り、「TLP 中国語 2018 年度研修」を九州大学と合同で実施した。本稿は、研修に参加した学生たちの報告を時系列順にまとめたものであり、各訪問場所の担当者の報告書を載せている。

3 月 14 日、3 月 15 日：選択制のフィールドワーク

それ以外：全員参加

台湾研修に参加した学生は以下（五十音順）：

宇野瑛理香、岡本理沙、川瀬翔子、蔡毓婷、助田一晟、戴越、田尻夏希、三富まい、森本拓歩、渡邊夏希

引率として教員の阿古智子、学部 3 年の小林真也、学部 2 年の三谷怜司が同行した。

2019 年 3 月 18 日

目次

p.3	台湾研修日程
p.6	日誌
p.15	二二八紀念館
p.17	緑島、人権文化園区
p.19	緑島の自然・産業
p.21	拉勞蘭小米工坊
p.25	鄭南榕基金会
p.28	景美人権文化園区と蔡さんとの座談会
p.31	ヴィッカーズ先生の講義
p.33	台湾民主基金会
p.36	新境界文教基金会
p.39	阿嬷家（慰安妇纪念馆）
p.41	光さんの町歩き
p.44	新聞記者との懇談会
p.46	緑色行動連盟
p.49	中華基督教境界基金会
p.53	龍応台基金会
p.55	遠景基金会
p.57	国立台湾博物館

2018年度 台湾研修日程

日付	活動内容
3月10日（日）	台湾到着(NH851 羽田9:20—松山12:30) (九大：福岡12:10-台北・桃園13:50) 15:15 ゲストハウス発（バス）、15:30 二二八記念館（九大は空港から記念館に直行）、18:00 台湾師範大学ゲストハウス着（夕食は自由）、20:00東大・九大合同のオリエンテーション（ゲストハウスで）
3月11日（月）	6:10 ゲストハウス発（バス）、6:30 空港着（朝食はバスの中で支給。飲み物のみ各自持参）、7:20 華信航空391便で台東へ（8:10着）。8:50に富岡埠頭へ。9:30の船で緑島へ（10:30着）。11:30、緑島の宿に到着。11:30-12:30 昼食（シーフードなど。池塘有魚にて）。13:00-17:00 白色テロ時代に政治犯収容を目的に置かれていた教育施設の「新生訓導処」や「緑州山荘国防部緑島感訓監獄」などが置かれていた人権記念公園を視察。17:30 夕食。希望者は朝日温泉などへ（状況次第で）。
3月12日（火）	7:30-8:30 朝食、9:00-12:00 緑島の自然や街を見て回る。12:00-13:40 昼食（食後は街を各自自由に歩く）。13:50 埠頭へ。14:30-15:30 船で台東へ。16:30 バスで香蘭村へ。16:30-パイワン族の戴明雄牧師の案内で原住民文化や核廃棄物処理問題について学ぶ（夕食・宿泊：拉勞蘭小米工坊 台東県太麻里郷香蘭村10-25）。宿泊は男子学生、女子学生ともに大部屋。
3月13日（水）	6:00-7:10：朝食、7:10-8:00 バスで空港へ。8:40 華信航空 392 便で台北へ（9:30 着）、9:45 バスで鄭南榕基金会へ。12:15-13:15 海霸王（中山北路三段 59 号）で昼食、13:15-14:00 景美人権園區を参観、14:00-17:00（蔡焜霖さんらとの座談会）、17:00 台湾師範大学ゲストハウス着、18:00-20:00 二二八基金会主催夕食会（稻香村：和平東路一段 242 号）
3月14日（木）	台北でフィールドワーク（台湾師範大学ゲストハウス泊）
3月15日（金）	台北でフィールドワーク（台湾師範大学ゲストハウス泊）
3月16日（土）	午前：午後の発表会の準備（東大&九大合同で） 13：30 国立台湾大学、淡江大学の日本語科、日台学生会議の学生さんたちと交流会（台湾大学第二活動センター604号室） 夜：食事をしながらの懇談会
3月17日（日）	午前：自由行動、日本に帰国（NH852 松山16:50—羽田20:40）

宿泊先:3月10日 台湾師範大学ゲストハウス(臺北市大安區和平東路一段 129 號)、
 3月11日 凱薪飯店(台東縣綠島鄉 102-12 號)、3月12日 台東:拉勞蘭小米工坊
 ゲストハウス、3月13-17日 台湾師範大学ゲストハウス

＜台北フィールドワーク＞

	3月14日	3月15日
午前	8:30-9:30 Edward Vickers 先生の講義 (In 台湾師範大学教育学部 (College of Education) 3 階会議室 2) 講義終了次第出発 10:00-11:15 台湾民主基金会 (Ako, Vickers, Maehara) 地下鉄師範大学駅 ー大安駅 (18 分) 11:30-12:45 新境界文教基金会 (Ako, Vickers, Maehara) タクシーで 12 分	8:45 にゲストハウス出発 9:00-10:00 緑色公民行動連盟 (Ako, Maehara, Vickers) 徒歩 10 分 10:30-12:00 中華基督教救助協會 (フードバンク、社区発展) (Ako, Maehara, Vickers) バス 706 で保生路口へ (21 分)、或いはタクシーで 12:30-15:00 國立台灣博物館 (Vickers, Maehara) バス 706 で保生路口から博物館へ (26 分)
昼	自由	自由
午後	14:00-15:30 阿媽家 (慰安婦記念館) (Vickers, Maehara, Ako) 16:00-17:30 栖来ひかりさんの街案内 (温州街など) (Maehara, Ako, Vickers)	14:00-15:20 龍応台文化基金会 (テーマを設定して台湾の若者と交流)、華山文化創業区 (Ako) 徒歩 10 分 15:30-17:00 台湾智库 賴怡忠さん、劉夏如さんのお話(台湾外交・国際関係、邱永漢について) (Ako, Vickers, Maehara) 地下鉄古亭駅から公館駅 (24 分) 博物館からは地下鉄西門駅から公館駅 (31 分)
夕方から夜	九大の企画:日本の新聞記者(読売新聞)との懇親(Maehara, Vickers, Ako)	自由:夜市など 師範大学の先生方との交流

*この中から各学生最低3つを選択。組み合わせは自由。選択した活動以外の時間は各学生の関心に従って行動。台湾の学生さんたちがサポート役として同行。

宿泊先・訪問先の住所

拉勞蘭小米工坊 台東縣太麻里鄉香蘭村 10-25

<http://lalauran.com.tw/home/>

台灣師範大學迎賓館：臺北市大安區和平東路一段 129 號

<https://www.sce.ntnu.edu.tw/home/accommodation/?Guest>

台灣民主基金會：臺北市大安區信義路三段 147 巷 17 弄 4 號

<http://www.tfd.org.tw/opencms/chinese/index.html>

阿媽家：臺北市大同區民生西路 240 號 10 樓

<https://www.twrf.org.tw/amamuseum/>

新境界文教基金會：臺北市中正區北平東路 30 號 8 樓

<http://www.dppnff.tw>

遠景基金會：臺北市中正區汀州路三段 60 巷 1 號

<https://www.pf.org.tw>

綠色公民行動聯盟：臺北市中正區羅斯福路二段 70 號

<http://www.gcaa.org.tw>

國立台灣博物館：臺北市中正區襄陽路 2 號（二二八和平公園內）

<https://www.ntm.gov.tw>

龍應台文化基金會：臺北市大安區金山南路二段 165 號 4 樓

<http://www.civictaipei.org>

中華基督教救助協會：新北市永和區保生路 1 號 20 樓

<https://www.ccra.org.tw>

台灣智庫：台北市中正區愛國西路 9 號 8 樓

<https://www.taiwanthinktank.org>

2018年度台湾研修 日誌

阿古智子

3月10日

7:30 に羽田空港に集合。誰一人として遅れず、事前にオンラインチェックインを済ませていたので、荷物を預け、wifi を借りるところまで 20 分ほどで済みました。フライトは遅延せず、台北（松山）空港に到着。空港から 3 台のタクシーに分乗して台湾師範大学の迎賓館（ゲストハウス）へ。タクシーが違うビルに到着してしまったチームも、自分たちで、中国語で道をたずねて正しいところまでやってきました。15 時すぎ、228 国家記念館に向けて出発。228 基金会が事前に手配してくださった観光バスにて 10 分ほど。貴賓室でのレクチャーの後、展示を 1 時間ほどかけて見て回りました。解説は中国語で。国立台湾大学の修士の学生さんにざっと通訳をしてもらいました。途中から九州大学のチームが合流。今回の研修は最初から九大チームと行動を共にします。夜はゲストハウスから歩いて 10 分ほどの永康街で小籠包など。体調を崩す学生もおらず、元気に初日を終わりました。

3月11日

朝 5:50 にゲストハウス一階に集合、マイクロバスに乗って、松山空港へ。台東行きの飛行機に乗る準備をしましたが、中国大陸出身の学生の一人（九州大学の博士課程学生）が、「入台証」（中国大陸の人が台湾に入る時に使う証明書）をゲストハウスに置いて来たとのことで、急遽取りに帰ることに。最近、中台関係が少し厳しくなっているからか、一度台湾に入っているにも関わらず、台湾内の移動時に再びチェックされるようです。高雄などには再発行をするカウンターがあるそうなのですが。台東行きの飛行機のカウンターが閉まる 1 分前に当該学生は到着し、チェックインを済ませることができました。東大の二人の中国大陸籍の学生は、たまたま「入台証」を携帯していました。何かあるかもしれないので、今後は常時「入台証」は携帯するようにしなければなりません。

台東に無事到着し、緑島行きの船乗り場へ。台湾はあいにくの雨模様で、船はだいぶ揺れました。大きく上、下と揺れるごとに、ジェットコースターに乗っ

ているようで、大きな歓声が上がりました。そのうち眠る人が増えていきました。船酔いの薬は私が多めに持っていき、持っていない学生に配りました。気持ち悪くなる学生はいませんでした。

緑島に到着。お昼は地元の名物の鹿肉や海鮮など。その後、緑島でのメインの活動である人権記念公園での学習。白色テロ時代に政治犯収容を目的に置かれていた教育施設の「新生訓導処」や「緑州山荘国防部緑島感訓監獄」などを視察。13:00-17:00 の長い時間、みっちりとレクチャーを聞いたり、展示を見回ったりしました。立ったまま話を聞くことが多く、多くの学生が疲れているようでした。昨年はこの時間帯、私が全て通訳しましたが、この日は台湾出身の九大の学部1年生が全てやってくれました。台湾で生まれ育ち、日本に来たのは昨年10月。お母さんが日本語通訳者で、祖父も日本語を話すため、小さい頃から日本語に親しんでいたそうです。それにしても留学経験がないのに上手でした。おかげで私は楽をさせてもらいました。東大の学生たちは、中国語を部分的に聞き取っている感じです。台湾の学生さんの上手な通訳を聞いて、良い刺激をもらったのではないのでしょうか。

17:30 に夕食。夕食後、希望者10名は朝日温泉へ、他の学生たちはホテル付近のお土産屋さんなどを散策。

3月12日

緑島のホテルで7:00起床。7:30朝食。8:50まで散歩など。その後、観光バスに乗って、緑島のツアリストセンターへ。緑島の自然や文化を説明してもらいました。その後、緑島の名所である將軍岩や観音洞などを見て回りました。昨日は小雨ですがずっと降り続いていましたが、この日は晴れ間がのぞく天気で、昨年のように真っ青の空とはいきませんでした。気持ちのいい風と陽光を感じながら緑島を歩くことができました。昼食後、船乗り場へ。波は行きよりも小さく、船酔いした人は一人もいなかったと思います。

台東から香蘭村まではバスで40分ほど。パイワン族が暮らす香蘭村は、狩猟や自然農法など、伝統的な生活習慣や地元の文化を回復させる形で、村おこしをしています。18年前にこの村に移住した小学校の先生に村をざっと案内してもらい、狩猟の教室や民宿を経営しておられる Sakinu さんにお話を伺いま

した。昨年もこの村に行きましたが、宿泊はしませんでした。今年は宿泊も村で。女子は Sakinu さんご家族が建てられた大きな木造家屋の民宿で、男子はその近くの民家に宿泊、教師はそこから歩いて 5 分ぐらいの民宿に泊まっています。夕食後、20:00 過ぎから小学校の先生や青年会のリーダーにお話を伺いました。高齢化が進む中、何が若い人たちを村に引き付けているのか。8 割の人が大学を出たり、一定期間外で働いたりしていても、やがては村に戻ってくるのだと言います。遅い時間にもかかわらず、学生たちは熱心に質問していました。終わったのは 22 時半。明日も早いので、学生たちには宿に帰って眠る準備をさせました。

3 月 13 日

香蘭村の朝は早かった。私たち教師が泊まっている民宿の鶏は 3 時過ぎから「コケコッコー」と鳴き始め、私は時間を間違えて起きてしまいました。寝坊を恐れていたからかもしれません。少しまた寝て起床。6:30 にはバス乗り場へ。学生たちは皆、時間に遅れずバスに乗り込んでいました。朝食はバスで、民宿で作ってくださった中華クレープとミルクティー。台北行きの飛行機に無事乗り込み出発。

台北についてすぐ観光バスに乗り込み、鄭南榕記念館へ。鄭南榕が焼身自殺をしたマンションの一室を使って設置されました。雑誌『自由時代』の編集長だった鄭南榕は、戒厳令下で厳しい検閲にあいながらも雑誌を発行し続け、台湾独立運動を主張しました。記念館には黒く焦げた編集長室が残されていて、とても衝撃的です。

昼食をとって、景美の人権園區へ。昨年もお世話になった蔡焜霖さん（読書会に参加しただけで拘置所と緑島に 10 年以上も収監された）にご案内いただきました。蔡さんは、秘密裁判が行われた法廷や、劣悪な環境の刑務所、各種の展示を丁寧にまわり、台湾の歴史を説明してくださいました。

17:20 頃、終了。6:30 に台東の村を出てからここまで、学生たちはよく頑張りました。疲れている様子の学生もいましたが、ほとんどの学生が疲れも見せず、メモを細かくとったり、質問も活発にした

りしていました。夕食はゲストハウスの近くで蔡さんや228基金会の理事を務め、私たちの台湾研修を全面的にご支援くださっている国立台湾政治大学の薛化元先生、228記念館の館長・楊振隆さんらと一緒に北京料理。数えて今年90歳という蔡さんは、去年は風邪気味で薬を飲みながら説明してくださいました。今年は風邪もひいておらず、しっかりした足取りで案内してください、夕食後もレストランで長い時間、学生たちの質問に答えてくださっていました。心から尊敬すべき方です。

3月14日

朝食は各自、師範大学の一階で屋台から購入（ゲストハウス提供の80ドルまでのクーポンが使える）。8時半から九州大学教育学部のエドワード・ビッカーズ教授による講義（英語）。ビッカーズ教授と阿古は香港大学博士課程の時から友人。九大とは昨年半分だけ活動を共にしましたが、今回は最初から最後まで一緒に動いています。東大12名（うち世話役の上級生2名）、九大11名を3名の教師（九大のもう一名の教員は前原志保さん）で引率する形になっていますが、何班かに分かれてタクシーに乗ったり、行き先が二箇所ある時に協力し合ったりできるし、学生たちの関心に応じてアドバイスもできて良い効果が出ていると感じています。

教科書や博物館の展示を通して、歴史の叙述の仕方を比較研究しているビッカーズ教授の講義のテーマは、"Museums, Heritage, Identity Politics"。本省人と外省人、国民党支持者と民進党支持者、世代などによって、台湾人の歴史に対する認識は異なります。時代や政権によって、博物館の展示は変わってきているし、さらに同じ日本の植民地統治下にあった韓国などと比較してみれば、より特徴が明らかになります。victimhood（被害者意識）や女性の声はどのように表現されているのか、多文化主義はどのように認識されているのか。ビッカーズ教授は、様々な博物館を事例に挙げ、展示を注意深く見ることで、国や集団が設定する boundary を読みとるようにと学生たちに教えていました。緑島や景美、鄭南榕記念館など、これまでに訪れた博物館を振り返ると共に、このあと訪れる慰安婦博物館や国立台湾博物館について予習することもできました。

講義の後は徒歩で30分かけて台湾民主基金会へ。基金会の歴史を説明していただき、2人の若い研究者（元ジャーナリスト）と Kerry Chen 代表を囲んでデ

イスカッションを行いました。同性婚や日本の果物輸入などについて問うた住民投票について、不満があるはずなのに声を上げない日本人と活発に政治に参加する台湾人の比較、メディアの問題（フェイクニュースや過度な商業化）とメディアリタラシー向上のための施策などについて活発に議論しました。一人の学生は、Chen 代表の、一家で台湾から米国に逃げるように移住した経緯について、詳しく知りたいと何度も質問していました。日本で育った中国大陸籍の学生ですが、抽象的な問題としてではなく、自分だったらどうだろうかと、自分の肌身を通して考えようとしているのだと感じました。

台湾民主基金会からタクシーで、民進党系のシンクタンク、新境界文教基金会へ。新境界文教基金会では、都市計画とコミュニティサービスの専門家が話をしてくれました。ジェンダー平等を実現するには、中高年の女性の考え方を変えるべきだが、その一番良い方法は彼女たちが受け入れやすい形で就業の機会を与えること。介護や子育ての分野に積極的に中高年の就業経験のない・少ない女性たちを採用する政策をコミュニティで進めているそうです。20-30代では女性の就業率が高いのに、どんどん下がっていく台湾の状況の中で、政府は女性の復職をどのように支えようとしているのか、晩婚、未婚化が進んでいるが、結婚や出産がしやすい社会をどのようにつくろうとしているのかなど、学生たちは活発に質問していました。

この基金会では英語と中国語を混ぜて交流しました。日台学生会議の学生さんたちがヘルプに来てくれています。

新境界文教基金会から阿媽家（慰安婦記念館）へ。慰安婦をテーマにした博物館です。講義を1時間ききました。朝のビッカーズ教授の講義でも言及されていましたが、台湾の慰安婦に関する研究や活動は、政治化することを極力抑えようとしてきたという経緯があります。台湾の置かれている国際的な位置にも関連して、そうなったのでしょうか、比較の観点から見ると大変興味深いです。阿媽家にも急いで来たので、お昼が食べられなかった学生さんには、葱油餅を支給。講義を聞きながら食べました。

阿媽家からタクシーで台湾大学の方向へ。日本の家屋、古い水路の遺構などが残っている温州街を、栖来ひかりさんが案内してくださいました。1時間半ほ

ど歩き、台湾師範大学に到着。休む暇もなく、讀賣新聞の牧野田記者から中台関係などについてお話を一時間ちょっと伺いました。

牧野田さんたちと夕食に行ったり、学生たちで自由に行動したり、夜はそれぞれに過ごしました。私とビッカーズ教授は、活動のアレンジでお世話になった民進党の若い人たちと食事しました。

14-15日のプログラムは選択制で、選択した活動以外の時間帯は、学生たちが各々自由に行動しています。自由行動の時間帯については、LINEで常時連絡を取り合い、複数人数で行動させるようにしています。

3月15日

8時40分集合。本日最初の訪問先は緑色公民行動聯盟。台湾師範大學ゲストハウスから歩いて5分ほど。原子力発電やエネルギー問題について、1時間の講義をしてもらいました。台湾は原子力全廃の方向に舵を切りましたが、反原子力の社会運動が高まった2016年頃と比べると、現在は社会の関心も低くなり、逆に原子力発電を支持する人たちも出てきています。放射性廃棄物の処理の問題もあります。昨年原子力発電について住民投票を行い、今年も行われる予定ですが、熟議とこうした投票のあり方、メディアのあり方（フェイクニュースやソーシャルメディアの利用における問題点など）についても活発に議論を行いました。

次の訪問先である中華基督教救助基金会には初めて公共バスを使いました。グーグルで調べるとそれが一番便利でした。30分で到着。台湾では離婚率がとても高く（50%？とおっしゃっていましたが・・・）、親が家にいない子どもも多い。子どもに寄り添うプログラム（放課後に宿題を一緒にやり、お昼や夜の食事も提供する）を全台湾で実施しているそうです。このプログラムとも連携している食物銀行の事業も注目されています。災害援助に関連する物資の保管や配布がきっかけとなった事業ですが、最近は低所得家庭への食物バックの配布を広げています。日本よりも進んでいるような感じがしました。高齢者向けの事業の説明もしていただきました。時間がないのでお弁当を用意してもらい、意見交換は食事しながら行いました。

14 時に龍応台文化基金会へ。龍応台は中国語圏ではほとんど知らない人がいないぐらい有名な作家で、馬英九政権下で文化部長も務めました。この基金会は若い人たちの社会への関心を高め、グローバル市民としての意識を育てるための活動を行なっています。数々のパブリックフォーラム、国際的な青少年交流の連携など。阿古は昨年 11 月に「戦争」をテーマにしたパブリックフォーラムで講演させてもらいました。今回、学生を連れて訪問したいと連絡すると、あらかじめ基金会でボランティアをしている大学生に声をかけてくださっていて、7 人が来てくれました。台湾人のほか、中国大陸出身者が 2 名、カナダで教育を受けた台湾人。若い人たちが「未来」にどのような思いを抱いているのか、というテーマから議論を始めました。仕事、結婚、家庭……。そこから、ジェンダーについて話が及び、同性婚についての考え、台湾で行われた住民投票などについても活発に意見交換しました。学生たちはとても盛り上がっていましたが、次の予定が入っていたので、互いに連絡先を交換し、引き続きオンラインで議論しましょう、ということになりました。

最後は台湾シンクタンクで。遠景基金会の研究者から台湾をめぐる外交・国際関係について話を聞きました。その後、玉山出版社の劉夏如さんが、邱永漢について話してくださいました。邱永漢が戒嚴令下、迫害から逃れるために台湾を離れ、その後、香港、日本などでの経歴やそこから生じた思いなど。とても興味深い内容でした。

夜は自由行動。学生たちは夜市などに行ったようです。龍応台基金会で知り合った人たちも、誘っていたようです。

3 月 16 日

午前中は最終報告会の準備。毎日の記録作成で夜中まで作業をしている学生もあり、ほとんどの学生が朝は少しゆっくりめに起きたようです。11 時頃、私はビッカーズ先生と紫藤廬という茶館に行きましたが（自分の勉強も兼ねて。）、ちょうど出くわした学生たちもお昼を食べにいくと言っていました。前日知り合った学生さんたちと約束をしたとのこと。次々に友達を作っているようです。

*紫藤廬：1920年代に建てられた日本人高官の官舎をレノベーションしたお店。日本統治が終わってからは、財政部税務署長で、台湾大学教授の周徳偉氏の住まいだった。戒厳令の時代、ここで文人たちが密かに勉強会やサロンを開いていたそうです。1997年に政府が接收したが、市民の保存運動によって古跡として指定されるに至り、2008年に茶藝館として再オープン。

13時半に台湾大学学生交流センターへ。台湾の学生さんたちがあらかじめプロジェクターなど用意してくれていました。東大は（１）観光、（２）コミュニティ、（３）人権の３つのグループに分かれて発表。引き続き、九大チームも発表。台湾の学生さんたちと議論したい問題をそれぞれが提起しました。それに基づいて、グループディスカッションを半時間ほど行い、グループで議論した内容を整理。最後に、通訳・記録を手伝う台湾の学生さんを紹介して下さった真理大学の永井江理子先生にコメントをしてもらいました。九大の二人の先生と私もまとめをして終了。台湾に対する理解はまだ浅く、深みのある発表であったとは言えませんが、１週間の研修で学んだこと、経験したことをまとめ、振り返る良い機会になったと思います。

17時半、懇親会へ。地下鉄で移動。ゲストハウスの予約や台湾ドルの換金などにも協力して下さった台北師範大学の先生が、懇親会の会場も予約して下さいました。普段、立法院の議員たちが使っているレストランで、立法院の中の古い趣のある建物の中にあります。台湾の学生さんたちも一緒に４テーブルで交流しながら食事しました。台湾の学生さんの中には、香港や日本から留学している学生もいました。香港の学生２名（母語は広東語）は日本語が非常に上手で驚かされました。毎年研修に協力してくださっている淡江大学の富田哲先生も参加。食事がほぼ終わったあと、助田が中国独楽（ディアポロ）を実演し、盛り上がりました。助田は、台湾研修の参加申し込みの書類に、中国独楽について非常に細かく書いていました。自由時間に中国独楽について調べたり、独楽を買いに行ったりしたようです（日本より随分安いそうです）。

食後はゲストハウスに戻るグループ、台湾の学生たちと出かけるグループに分かれました。後者は夜景を見るために半時間ほどで登れる象山や夜市に行きました。

3月17日

午前中は自由行動でした。学生たちは台湾の学生さんたちと淡水に遊びに行ったり、買い物をしたりしていたようです。14時にゲストハウスを出るときには、別の台湾の学生さんたちが見送りに来てくれていました。16:50 台北（松山）発の飛行機で、21 時前に無事羽田に到着しました。

2019 年 3 月 10 日 台湾研修 1 日目（全員参加）

二二八紀念館

宇野瑛理香

二二八紀念館では、まず紀念館の紹介動画を鑑賞し、その後、展示について二二八基金会のちんさんともう 1 人の方にガイドしていただきました。

動画では、二二八紀念館がどのような歴史を経て現在の紀念館になったのか、主に建物の歴史についての説明がありました。二二八紀念館となっている建物は、日本の統治下であった 1931 年に台湾教育会館にリフォームされました。その後台湾の教育方針は大きく変わり、民間組織や教育会が、政府の示す方針に従い様々な教育を推し進めて行きました。その中に美術教育が含まれており、それがのちの美術運動へと繋がっていきます。戦後の 1946 年には、国民党政権下で現在の二二八紀念館において省参議会在正式に発足します。1931 年に台湾教育会館へリフォームされたこと、そして 1946 年にここで省参議会在発足したことから、この建物は二二八事件との関連性が高いとされ、2007 年に二二八紀念館となりました。二二八事件、そしてその後の虐殺被害者の遺族の要望もあつてのことでした。2011 年に紀念館は開館し、その目的は、二二八事件について人々に知ってもらい教訓としてもらうこと、そして、遺族の心を労わることの 2 つでした。

続いて、二二八紀念館の展示について説明していただきました。まずは、日本が台湾を統治し始めた時から日本が敗戦し国民党が政權を握るまでのお話を聞き、その後、二二八事件が起こった経緯とその後の虐殺についてのお話を聞きました。

台湾へ上陸した日本人たちは台湾のインフラを整備した一方、中心部には日本人のみが居住するなど日本人と台湾人の身分には大きく差がありました。その後台湾人も日本人同様の教育を受けられるようになり、文化も日本文化と台湾文化が混ざっていきました。1935 年には日本統治 40 周年を記念し台湾博覧会も行われました。1936 年には皇民化政策が開始しましたが、初めは台湾人は日本国民ではないとされ、台湾人が戦地へ派遣されることはありませんでした。しかし、戦況が悪くなるにつれ、台湾人も陸軍特別志願兵として召集さ

れるようになりました。1945年に日本が敗戦すると、台湾での日本統治時代も終了し、国民党政府へ期待を抱く国民もいました。しかし、中国内戦の影響もあり物価が高騰し、また外省人への参政権の優遇等で不満を抱く内省人もいました。そんな中で二二八事件は起こりました。

二二八事件後、政府は表向きは国民の要求を聞きました。しかし、その裏では中国本土に軍隊の派遣を要請し、軍隊上陸後は無差別虐殺が行われました。虐殺は大変残酷で、また子供や女性も対象となりました。記念館には被害者の写真がたくさん展示しており、当時の様子が伝わってくるようでした。



最後に記念写真を撮影し、東京大学シャープペンシルを差し上げました。貴重なお話を聞くことができ良かったです。



2019 年 3 月 11 日 台湾研修 2 日目(全員参加)

緑島、人権文化園區

戴越、岡本理沙

今日は緑島人権文化園區に行きました。台北から飛行機や船を乗り継いで、やっと辿り着きました。

かつての緑島は政治犯と思想犯を収容する場所でした。よく知られた緑洲山荘と莊敬營区には、政治犯が集められ管理され、当時は白色テロを象徴する地だったのです。けれども今では人権基地に生まれ変わり、西川の公館村漁港より、人権記念公園、緑洲山荘、莊敬營区、緑島技能訓練所、東側の燕子洞と周辺海岸までの約 32ha が緑島文化園區に指定されており、見学を受け入れています。独房、拘留房、監禁房を巡り、被害者の氏名が刻まれた人権記念碑へ進み、人々が流した涙に思いを馳せましょう。

上記は台東の観光ページで紹介されている、緑島の説明です。白色テロとは、二二八事件下の戒嚴令下における、国民党政府による反体制派に対する政治的弾圧です。私たちは、ツアーガイドとともに、この場所の様々な展示物を観察していききました。

はじめに、投獄者が絶対に通ったとされている、港から緑島の通路にある象鼻岩を見せてもらいました。投獄された者は、これを絶望の思いで通ったとされ、今でもこれを見ると泣いてしまう人が多いそうです。



次は、緑州山荘の建物を見て回りました。壁には、反共産主義、反台湾独立主義のスローガンが書かれていて、当時の政府の政治思想がはっきりとわかりました。八卦楼と呼ばれる監獄では、囚人を効率よくまとめようとした政府の工夫とともに、その劣悪な環境に驚きました。トイレの水で、顔や体を洗い、日常用水として使ったり、狭い部屋に閉じ込めたりなど、人権が顧みられない構造になっていました。独居房は、さらに不衛生で、圧による耳鳴りで精神に異常をきたす人も多く、自殺防止のために、壁はスポンジでできていたとのこと。その一方で、貝殻アート制作の外役や、図書貸出のための一覧制作の仕事など、選ばれた人にはある程度の人間らしい生活の可能性もあったようです。



バスに少し乗って、次は新生訓導処に行きました。そこでは飾ってあるジオラマを見物しました。一番視覚的に訴えかけられたのは、最後にみた部屋にたくさんの蠟人形が配置されて、当時の寝る前のささやかな娯楽時間を模した情景です。当時は、現在の設置されている二倍ほどの人間が暮らしていたそうなので、どれだけ窮屈な生活だったかを肌で感じました。これは、あとでバスガイドの李さんに言われたことですが、現地の人は怖がってこの部屋には立ち入らないそうです。なんでも、たくさんの死者が出た跡地なので、心霊が出るのだそうです。写真はアドバイス通りに消しました。

一番印象に残ったのは、面会室です。そこは月一回家族と会うことが許されている場所でした。当時のように、受話器越しの会話をしてその頃の台湾の情勢に思いを馳せました。しかし、月一度とはいえ、私たちの何倍もの精神的、時間的、物理的コストが必要だったので、面会はなかなか実現するものではなかったそうです。すでに大変だと感じていた私たちにとってそれは大きな衝撃でした。

2019年3月12日 台湾研修3日目(全員参加)

緑島の自然・産業

蔡毓婷、三富まい

本日の午前はガイドの李さんのお話を聞きながら、緑島の観光資源を見て回りました。観光客サービスセンターで緑島の概要を聞いたのち、將軍岩などの海蝕地形、信仰の中心であった観音洞、砂浜を訪れました。以下に学んだ内容をまとめます。

緑島は自然に恵まれた地域であり、人口4000人、面積16平方キロメートルの小さな島です。豊かな自然は台湾や海外から多くの人を引き寄せ、リラクゼーションの場となっています。特に大白浜をはじめとするきれいな海とビーチには毎年島の住民を超える数の観光客が訪れます。また緑島は日光と黒潮によりダイビングの名所となっており、豊かなサンゴ礁を有するため、ダイビングに訪れる人も多数います。近年では島の環境保護を目的に自転車による周遊を観光客に推進しています。

芸術のムードを漂わせた民宿などが観光名所として栄える一方で、中学校は南陵村(南西部)にしかなく、高校からは台東にいかないといけないそうです。また、過去の白色テロの遺跡も多数残っており、緑島監獄は今でも使われています。このように緑島は様々な側面を持ち合わせている島であります。

また緑島は火山島で、そのほとんどが安山岩質となっています。しかし、海底の隆起によりサンゴ礁を元とする岩質も存在しており、異なった時期の火山活動によって島が形成されました。この島の性質に関連した観光資源に特徴的な海蝕地形と朝日温泉があります。

海蝕地形の例としては、將軍岩、睡美人と哈巴狗、樓門岩などが挙げられます。將軍岩は部下に向かって指揮をしているような形の岩です。烏帽子のような細い棒部分は台風によって折れてしまったとのことでした。実際に訪れると將軍岩の手前は緑島人權記念公園となっていて、二二八事件の受難者の名前が刻まれていました。睡美人は別名眠り姫ともよばれ、仰向けになって寝ている女性のように見える岩です。腹部のあたりは埋め立てをして形を整えられました。哈巴狗はパグ犬のことで、寝そべっている犬のように見える岩で、睡美人の頭部にお尻を向ける形で並んでいます。小長城を登った展望台からはこの2つの岩をさらに綺麗に臨むことができました。樓門岩は実際には訪れません

でしたが、第二次世界大戦の爆撃の影響で門のような穴ができたそうです。このように、緑島の地形は様々な要因が重なって形成されたことがわかりました。朝日温泉は世界で楽しむことができるのは3箇所しかないという海底温泉のうちの1つです。海底で熱水が吹き出すところを海底温泉と呼ぶそうです。本研修の参加者の一部も昨日(3月11日)の夜に朝日温泉を訪れました。

昔はアミ族とダオ族が住んでいたといわれている緑島の主産業は農業と漁業でありました。そのため島の住民は宗教を非常に重んじています。その代表例として観音洞があげられます。観音洞には自然にできた観音像があり、観音様に見える人は心に観音があるといわれていました。また昔は一般的に門のところにある獅子の雌雄は獅子が口空いていたら雄、閉まっていたら雌でしたが、則天武後の頃から発言に関する男女平等がうたわれ、獅子は両方とも口が開くようになりました。オスの足の下には権力を象徴する玉があり、メスの足の下には子があって子育ての役割を表現しているそうです。

最後に訪れた砂浜では星の砂を見つけることができるということでしたが、貝殻などを持ち帰ることは禁じられており、罰金が課せられます



図 1：睡美人と哈巴狗



図 2：日本ではなかなか見ない
野草

2019年3月12日 台湾研修3日目(全員参加)

拉勞蘭小米工坊

川瀬翔子、田尻夏希

村についてから、ラオムーさんに村の中を案内していただいた。とても友好的に迎え入れていただいたが、昔は案内人がいないと敵とみなされ、違う部落には入れなかったという。そもそも部落に入るための道も見つからなかったそう。案内人が「サスクザン（＝一時的な休憩場所）」に旅人を案内し、そこで休んでもらっている間に部落に戻って旅人の来訪を伝える。それで初めて違う部族の中に入ることができた。また、パイワン族はアミ族、ハッカ族、ビンナン族とともに現在村がある位置より1.5kmほど離れた場所に暮らしていた。この4部族間では争いが絶えなかったため、日本統治時代にパイワン族とアミ族とが現在のところへ移住させられた。現在の人口の比率はアミ族が、70戸、パイワン族が30戸ほどだという。計画的に作られた村であるため、道は比較的まっすぐに整えられていることが見て取れた。村の入り口からしばらく山に向かって登っていくと、「頭目の家」にたどり着く。家の前には「サオライ（＝栄光）」と呼ばれる石碑が立っていた。太陽が産み落とした卵を「ハッポダ（＝白い蛇）」が温め、そこからパイワン族が生まれたという伝説に基づいて太陽とハッポダが描かれており、絵の下方には家の名前（galuliegule / 卡魯勒古樂）が刻まれている。このサオライと庭、その庭にガジュマルの木があることが頭目の家であることの証だったという。また、パイワン族の文化においては家の名前がすなわち苗字の役割を果たしていた。家を継ぐのは性別にかかわらず長子と定められており、第二子、第三子以降は家を出て自分で家を建て、長老たちに名前を付けてもらう。そして以降はその家の名前を名乗ったという。しかしこの風習は日本統治時代に廃れ始め、中国国民党が入ってきて以降はみな中国の苗字を使うようになった。しかし、役人が適当に名前を付けることも多く、家族であるにもかかわらず苗字が異なるという事態も生じて混乱を招いたという。日本統治時代には他にも多くのパイワン族独自の風習が廃止された。室内葬もそのうちの一つで、祖霊信仰を持つパイワン族は亡くなった家族を室内でねんごろに弔い葬送を行う習慣があったが、非衛生的だとして現在では行われていない。

現在、村の道に沿った壁にはパイワン族の文化を伝える様々な絵が描かれている。これはパイワン族の文化を残そうという活動の一環であり、「老若男女、みんなで描いた絵なので一つ一つタッチが異なっている」。素朴だが、非常に味がある絵だった。私たちが宿泊した「女土工坊」も、パイワン族の文化保全の一環としてサキヌさん（最初に村を案内してくださったラオムーさんのお兄さん）が建てたもので、真新しい木造の二階建てロッジの内部にはサキヌさんたちが狩ったシカの毛皮や頭骨などが飾られていた。

サキヌさんは、「台湾の価値とは何か」という問題を常に考えているという。台湾はオランダをはじめ清朝や日本など多くの国に植民地にされてきたため、台湾人の多くは自分たちのアイデンティティや価値を見失っているとおっしゃっていた。サキヌさんが現在考えている答えは、①子どもたちを教育して台湾の価値とする、②人に優しくする、③自分が生まれ育った土地・環境に愛着を持つ、という三点だそうだ。実際に、パイワン族の子どもたちにとって良い環境を整えるため、「木陰は子どもたちの宝である」という父の言葉にのっとりて去年は2,000本の木を植林した。今年はさらに1,500本植林したいという。

「自分は常にパイワン族の生活や文化、芸術について考えている」と話してくださいました。



作家として活躍なさっているサキヌさんだが、狩人としても、また大工としても一流の腕前を持っている。子供のころは勉強が苦手で、おじいさん、おばあさんが教えてくれる物語を聴くのが大好きだった。「常に自分をしっかりと持つように」という教えをはじめとして、様々な知恵が身についたという。現在は、口述で伝承されてきたパイワン族の伝説や昔語り、伝統的な生活や文化について書き残すとともに、「狩人の学校」を開催し、国内外の若者に自然とともに生きる方法を伝授している。「勉強しかできず礼儀が身についていない、挨拶ができない、火も起こせない若者が台湾にはどんどん増えている」ことを危惧し、子どもの教育をきちんと行うことが最も大切だと力説していらっしゃる。

った。彼が言う教育とは、学校の中で机に向かって行うものではなく、コミュニティの中で大人が子どもと関わりながら模範としての姿を示すことで伝えていくものだという。インターネットや文献ではなく昔から伝わる知恵を大切にし、経験を通して次の世代へと引き継いでいく。自然の中で、現代の技術を巧みに取り入れながら生活する様うかがえた。

小米工坊での夕食後には、パイワン族の既婚男性が狩りや祭りのために使うという集会所にて、青年会の幹部の方にお話をお伺いした。歓迎の歌で始まりパイワン族の伝統や文化など生活についてのお話をお伺いした後、質疑応答を行った。この集会所の入り口の彫刻はパイワン族の祖先と伝説を伝える御神体であり、子孫繁栄が祈念されて人間同様に扱われてきた。また、ここに既婚男性以外が入れる機会は子どもが父親を探す場合と大規模な狩猟の際に女性が村落を守る場合の2つだけであり、入る順も男性から女性、年長者から年少者というように決まっている。

パイワン族の伝統的な生活の復興は、平地での生活に順応した親世代ではなく、若者から20年ほど前に始まった。大体の流れとしては、1・2月に土地を整えた後3月に種を撒き、5月頃に近場で狩りをし、収穫やそれに伴う儀式を終えた10月頃になって山へ狩りに出るそうだ。パイワン族の方は、「小米だけで命を繋ぐことはできても、狩りだけで命を繋ぐことはできない」とおっしゃっている。3月には農業に専念することを神に示すため、猟銃に小米を詰める習慣があるのだ。

この他に、近代的な生活様式と伝統文化を復興させることの両立について疑問を持つ学生が多かったように感じる。まず部屋の内装について、多くの部屋で伝統的な彫刻のそばに近代的なエアコンが設置してあった。生活の方法そのものではなく、年寄りの知恵や価値観に意味があり、狩りの際の連絡には、携帯電話で連絡を取り合ったりしているそうだ。青年会のお二人も平地での仕事を持った上で、儀式により山との付き合い方を学び、パイワン族としての精神を持ち続けているのだ。若者の都市への流出については、進学や就職で都市に出たパイワン族の若者の80%が集落に帰ってくる。この「戻る」行動には集落に関する責任感が鍵となっており、そのためにも青年会を中心に皆で「何かを一緒にする」経験を通じて気持ちを養う工夫をしているそうだ。

この集落では、現在24名の高齢者と10数人の若者、15名ほどの中学生以下の子どもが暮らしている。坂道が多く、自然に密着した生活の中では、3つの側面から高齢者の生活を助けている。その1つは、青年会での集団労働、2つ目

は自発的な労働、3つ目は高齢者からの要請に応じた行動である。知り合いかどうかは関係なく、皆が困っている人を助ける姿勢があり、高齢者の生活の支援という面でもパイワン族の若者が集落に残ることは重要なのだそうだ。

この地域で行われている自然農法では、虫を手で除去するなど農薬を使わないことや、収穫後の小米を燃やして土地の養分にするなどの工夫がなされている。この他にも、きちんと聞こうとするとパイワン族に嫁がなくてはならないくらい様々な工夫があるそうだ。

伝統的な文化を大切にしつつ他の文化との衝突を避けるには、「違いを強調する」のではなく、「自分を表現する」ことが大切である。お話の最後にはパイワン族に誇りを持つ歌を歌ってくださり、全員で写真を撮った。多くの学生からの質問に遅い時間まで丁寧に答えてくださり、民族の文化や狩りとは縁遠い生活をしている我々の多くにとって、忘れられない経験ができたように感じる。



2019年3月13日 台湾研修4日目(全員参加)

鄭南榕基金会

助田一晟、三谷怜司

3/13日の昼前、私たちは台北市にある鄭南榕基金会を2時間ほど訪れた。前半は鄭南榕(詳細は後述)のドキュメンタリー映像を鑑賞し、後半は基金会の方に展示の案内と補足の説明を中国語と日本語で行っていただけた。

鄭南榕基金会の展示では引き出しを開けると、アーティストが厳選した鄭南榕直筆の日記や、運動の流れを示すパネル、雑誌編集室の再現模型、雑誌「時代」の見本、鄭南榕の遺品などがあつた。

鄭南榕についての基本情報

1. 台湾の民主化運動家
2. 台湾の政治雑誌「自由時代」編集長
3. 表現の自由を訴え、台湾の民主化を推進し、独立運動を主張



1984年、「雑誌」と「運動」を二本柱に発禁を掻い潜り続け、タブーとされていた国民党への抵抗をも辞さず、5年間に渡り302冊もの雑誌を出版し続けた。彼は政府ではなく「ニュース」こそが必要なものだという信念を持っていた。

彼の「100%の自由」「国民党は私を捉えられない、私の屍だけだ。」の言葉に代表されるように、強い覚悟が見られる人物であった。

年表

以下に簡単な年表を記す。

<生い立ち>

1947 2月 二二八事件勃発。

1947 9月 二二八事件の年に産まれる。これにより後々「自らの出生と二二八事件は切っても切れない関係」と強く意識する一因となる。

※父は本土から渡ってきた外省人、母は台湾の内省人であり、当時には珍しい恋愛結婚

<学生時代>

成功大学工学部に進むが、一流の思想家を目指し大学を転々とする。結局、国立台湾大学の哲学科に進むものの、孫文の思想を教える「国父思想」の授業を洗脳だと解釈し拒否し、中退。

<思想家として>

1986 反戒嚴令デモ 綠色行進などに参加する。

1987 二二八和平運動 台湾独立宣言を行い、支持を得る。「我是鄭南榕，我主張台灣獨立」

1988/12/10 国際人権デーであるこの日に法律の草案を雑誌に掲載

1989 上記の一件について、反乱罪として出頭命令がなされる。以降72日に渡る編集室での籠城抵抗に突入する。

1989/4/9 焼身自殺を遂げる。妻と最愛の娘は遺された。

「自由時代」が大きな影響力を持てた理由

雑誌「自由時代」が大きな影響力を持てた理由として、以下の4点があるそうだ。

- ・党外雑誌は政府の干渉を受けないので、完璧に重大事件を報道できる。

- ・美麗島事件以降、社会の動向に合わせて規制は徐々にゆるやかになってきていた。時代の潮流である。

※美麗島事件について・・・雑誌「美麗島」の代表である江さんが、高尾市内で政府当局の許可を得ずにデモを実施したことで、警察が出動した。この衝突に際して、デモ隊には死傷者も出たという事件。

・規制を掻い潜る術を持ち合わせていた。具体的には、「～時代」というタイトルを～の部分を一変更にし出版物登録することで、発禁処分を物ともしない状態を活用した。

・規制があろうとも毎週出版日に遅れることなく情報を集め資金を調達し出版し続けた。



2019 年 3 月 13 日 台湾研修 4 日目(全員参加)

景美人権文化園區と蔡さんとの座談会

森本拓歩

私たちは、台北市内の景美にある景美人権文化園區を訪れた。緑に囲まれ、鳥のさえずりが響き渡る穏やかな場所であったが、昔は四方八方に鉄条網が張り巡らされ、銃を構えた衛兵に監視されている恐ろしい場所であったという。台湾は民主化に至るまで、白色テロと呼ばれる言論弾圧と大量虐殺の時代を経験した。景美人権文化園區は、権威主義による人権剥奪の歴史を伝える負の文化遺産であると同時に、人権発展の歴史を保存し伝える博物館である。私たちは、10 年もの間監獄に入れられるなど、白色テロの時代を経験した蔡焜霖さんにお話を聞きながら園内を案内していただいた。蔡さんは日本統治時代に生まれていたため、日本人と遜色ない流暢な日本語でお話ししてくださった。

まず白色テロの経緯を説明したのちに、蔡さんは仁愛樓を案内してくださった。仁愛樓という名前とは裏腹に、そこは政治犯を拘留・拷問する場所であった。この中に、監獄、面会室、警備室、売店、録音室など、あらゆる施設があった。

蔡さんは、読書会に参加した際に憲兵に捕らえられ、厳しい拷問を受けたのち、軍法処の裁判で 10 年の懲役と 7 年の公民権剥奪となった。自らの獄中生活を語ってくださった。親指に電線を巻かれ電気ショックを与えられるという拷問を受けたこと、6 坪の劣悪な部屋に 30 人が入れられたこと、朝 4 時に鉄の門が開くと処刑される人の名前が呼ばれ、その人が外に出ていくのを皆で涙を流しながら歌を歌って送ったこと、緑島監獄での生活で希望が見えなくなったときに、石の舞台の上で一緒に投獄された女性のダンスを見たことで、失望から立ち直ったことなど、獄中生活の惨さを感じた。

次に、軍事裁判が行われていた第四法廷、第一法廷を案内してくださった。当時の裁判は、美麗島事件までは恣意的な秘密裁判であったが、国内外の圧力もあり美麗島事件は公開裁判となった。この時、被告が吐露した民主化への思いがメディアによって拡散され、自由・民主を求める社会運動が活発になったとされている。

江南事件に関連する汪希苓特区も案内していただいた。そこでは、江南事件

での政府の行動に対して非難が殺到し、ついに戒厳令の解除に至ったということが説明されていた。

最後に、蔡さんは私たちの質問に答えながらお話をしてくださった。自分が語り部をしている理由を聞かれると、今の若者は白色テロの時代を知らず、暗い歴史を知らなければ将来また暗い時代がくるかもしれないので、誰に社会的責任があるのか、真相を明らかにして知っている限りを伝えることが traditional justice であり、台湾が前に進むために必要であると語った。

蔡さんは、投獄され獄中にいるときも、釈放された後も非人道的な扱いを受け、それでも後世の人たちに人権剥奪の歴史があったことを伝えていくために、88歳になった今でもボランティアで活動をされている。当時のことを思い出し、ときに涙ぐみながらも民主化への歴史を熱心に語る蔡さんの姿はとても印象的だった。今となっては自由・民主が当たり前とされているが、その背景には悲惨な人権剥奪の時代があったこと、その歴史を心にとめて自由を守り、自分達の責任や人権について考え続ける必要がある、ということを私たちは決して忘れてはならない。





2019年3月14日 台湾研修5日目（全員参加）

ヴィッカーズ先生の講義

田尻夏希

自由フィールドワーク1日目の最初のプログラムとして、九州大学教授のEdward Vickers先生に、“Museums, Heritage and Identity Politics”という題で講義をいただいた。

15年ほど台湾の博物館を研究している先生は、Museumの役割として、アイデンティティの象徴・教育施設（愛国主義教育基地）・娯楽の3つをあげている。現在台湾の博物館は、1930～40年代に日本の影響を受けて、教育方法の一つとして日本の文部科学省に当たる省庁の管轄になっている。また、植民地主義や近代化、慰安婦などそれに際する数々の犠牲を乗り越えた記憶や、文化や国民国家、多文化主義のアイデンティティにおいて重要な役割を果たしているそうだ。しばしば犠牲や抑圧と記憶される日本統治時代の受け入れ方として、韓国と台湾には顕著な差が見られる。韓国はソウルの景福宮の正面に建てられた朝鮮総督府を解体したが、台湾では総督府を今でも総統府として利用している。台南の国立台湾歴史博物館も日本統治時代のものだが、統治に際する抑圧とともに日本の功績をも示す側面を持っているそうだ。

アイデンティティの面では、国民党の戒厳令の時代の人々は、台湾を中国の一部（とくに復興基地と表現する）とみなし、「中国」の歴史や文化、文学を課す教育カリキュラムを強いられ、教育が軍政と国家主義から大きな影響を受けた。現在の台湾のアイデンティティとして、中華民国・中華人民共和国の問題も重要である。陳水扁は台北市長として台湾アイデンティティの確立に努めて1990年代に原住民公園を構想し、総統となった2000～2008年には、故宮博物院の分館を台中に建設し（NPM' Southern Branch' plan）、故宮博物院を中国のみにとどまらずより広いものに、台湾をアジアの多文化主義社会にすることを構想してきた。また、広島やベルリン、濟州島など犠牲の記憶を伝える場の間で国際的なネットワークを築く取り組みも行われている。

先述の日本統治時代の建造物の受容の違いにも類似しているが、犠牲の捉え方にも違いがある。例えば、韓国では反日に焦点が当たっている慰安婦問題も、台湾ではケアや歴史など被害者について焦点が当たっているそうだ。このような問題は被害者と加害者に境界を引くのが困難であり、本省人であって

も原住民から見ると迫害者足りうるのだ。慰安婦の問題にしても女性問題の一側面である。台南に記念館があり17世紀にオランダを打ち破った鄭成功も、中華民族の英雄としてよりは、日本人の母を持つ多文化主義の英雄として讃えられることが多い。このように台湾社会は比較的多文化たり続けてきた。

植民地時代の遺産への台湾と韓国との態度の差異は何によるのだろうか。台湾の「多文化主義」とはどのようなことなのだろうか。国民党と民進党の国家の本質に対する考え方はどのように異なるのだろうか。私たちはこの研修で二二八事件と白色テロ、パイワン族の歴史や文化、慰安婦や現代の台湾社会など多様なテーマについて広く見聞きし、考えてきた。これらの疑問に明確な答えを出すことは難しいが、今までの学びを生かして個々人で考察してみたい。



2019 年 3 月 14 日 台湾研修 5 日目(選択制)

台湾民主基金会

岡本理沙、戴越

台湾民主基金会(TAIWAN FOUNDATION for DEMOCRACY)

The Foundation was established with an inter-related, two-tracked mission in mind. Domestically, the TFD strives to play a positive role in consolidating Taiwan's democracy and fortifying its commitment to human rights; internationally, the Foundation hopes to become a strong link in the world's democratic network, joining forces with related organizations around the world. Through the years, Taiwan has received valuable long-term assistance and stalwart support from the international community, and it is now time to repay that community for all of its efforts.

<http://www.tfd.org.tw/opencms/english/index.html>より引用

上記の台湾民主基金会に参加した。

台湾民主基金会からは、Ketty W.Chan さん、Olivia Yang さん、Alison Hsiao さんの 3 人が私たちの対応をしてくださった。最初にこの機構が何をしているのか、そしてその理念についてのビデオを鑑賞した。そのビデオの中には、繰り返し、民主主義は“not given for granted”なのであり、その確率には勇敢な個人による犠牲が必要だったこと、そしてその歴史を風化させないことを強調していた。





Ketty W.Chanさんは身の危険の可能性から幼い時に渡米することになった背景を教えてくれた。そして、私たちの質問タイムが始まった。質問の中には、日本の政府の腐敗についてのものがあつた。その答えについて、他国についてとやかくいう身ではないことを前置きした上で、その透明性と参加意識を高めることを助言した。

他には、Ketty W.Chanさんのバックグラウンドを掘り下げる質問、ブレグジットを引き合いに国民投票の有効性とその是非についての質問、台湾メディアのフェイクニュースについての質問、台湾の民主主義と教育の関係性についての質問、ジャーナリストならではの心構えについての質問などがたくさん繰り広げられた。

台湾民主基金会に滞在した時間はわずか一時間あまりだったが、民主主義についての貴重な意見、並びに活発な議論、質疑応答がなされた。印象に残ったのは、台湾民主基金会は、手伝ってくれた人々を公表公開しないこと。公表したことで、民主主義ではない地域に家族などの知り合いに不利益が被られることを危惧し、必ず守秘義務が守られるとのことだ。Ketty W.Chanさんが言うには、”we do no harm”。あくまでも民主主義は人々の人権、尊厳、自由を守るための手段であり、台湾民主基金会はそれを助成する段階で、支持者のそれらが害されては意味がないと言う。これは、台湾民主基金会の、民衆のためを思った、彼らの本質を表す話だったと思う。

他には、民主主義の現状を維持することもそれはそれだけで進歩であるということを伝えてくれた。日本は民主的な国とはいえ、それを維持するには、我々の恒常的な努力が必要不可欠であり、台湾の市民に比べて、日本の市民はこれが不足しているのだと気付かされた。台湾と日本の民主

主義に対する意識の違いを認識し、これを改めることでより日本社会の構築に繋げることができるのではないかと考えた。

最後に記念写真を撮ってお別れをした。話が白熱し、長引いてしまったので、次のスポットにすでに遅刻していることがわかり、私たちは急いでタクシーで次に向かった。



2019 年 3 月 14 日 台湾研修 5 日目(選択制)

新境界文教基金会

森本拓歩、宇野瑛理香

(以下森本)

私たちは、民進党系のシンクタンクである、新境界文教基金会を訪問した。ここでは、託育政策催生連盟の王兆慶さんと、国立中興大学の董建宏さんに、台湾における地方の問題についてご教授いただいた。

まず、台湾は中年以降の女性の就業率が他国よりも低いことを示し、これらの女性をもっと社会に参加させることが重要であると指摘した。そして、皆が参加する社会を作るためには、一人一人に適した仕事を提供することが必要であると述べ、働いた経験のない中高年女性の教育と社会保障関係の仕事の雇用創出を主張した。それを実現させるための課題は未だに権威主義が残っていることと、政策がすぐに経済発展に結びつくわけではなく、時間が経って変化が見られる前に政権が交代してしまうことであると述べた。前者の例として、理想的なオープンな社会を実現させるために民進党が主張している LGBT の権利の主張が、地方ではフェイクニュースによって正しく伝わらなかったことを述べている。

上に述べた政策の最終的な目標は、「コミュニティの再生」であり「コミュニティの創出」ではないとしている。今あるコミュニティを活性化することで、地域間格差の解消を図っているのだ。この基金会は、その為に情報・場所・ものといったサービスの提供を行っている。企業などの団体に資金等の援助をするのでは、企業が自分の利益を優先してしまうため効果が薄いそうだ。また、民進党はコミュニティ開発のためにエネルギー政策や年金などの様々な制度・経済構造を改善していくことが必要なのだとしている。経済発展は時間がかかるため人々が実感できないと先に述べたが、それに関しては必要な改善を実施して人々に理解させるしかないとしている。

以上が二人にお話しいただいた大まかな内容である。以下は参加者たちから出た質問とその回答をいくつか紹介する。

・女性の社会進出は晩婚化とそれによる少子化を促進するのではないかな？
→現状の台湾の低い出生率の根源は賃金の低さゆえに育児に余裕がないことにあるため、まず賃金を高めるためにコミュニティ開発に注力し、その後に育

児を支える社会保障システムを整備するべき。

・チャイルドケアや認知症等で働くことができない人について

→密室育児と介護殺人は日本でも問題視されているように重大な社会問題である。子供連れの母親同士で交流できる場所を提供するといった活動はすでに行われている。また、認知症等で働くことができない人についても、料理を作るなど、彼らにできる仕事があるはずだから、それを適切に提供すればよい。

最後に、お話を聞いて感じたことを述べる。LGBT への差別も男女差もなく皆が参加する社会は、民主化の観点からも経済的な観点からも実現すれば問題解決に効果的であると考えた。しかし、コミュニティの再生が本当に実現するのは合点がいかなかった。私は董さんに「コミュニティ再生は不平等とそれによる若者の都市への流出を解決することができるのか」という質問をすると、「まず大事なのは地方に雇用を創出し、都市と同じ賃金水準になるように支援することであり、そうすれば地方での仕事に魅力を感じる若者が増えるためにこうした問題が解決できる」という答えをいただいた。このお答えは理に適っていると思うが、それだけでは不十分で、他にも産業と文化の融合といった事業を実行し、地方の魅力をさらに高めていくことが必要であると考えた。地域格差と都市への人口流出は日本でも同様に問題となっているため、こうした民進党の実践的な取り組みから学ぶことはたくさんあると感じた。



(以下宇野)

新境界文教基金会では、1人1杯用意していただいたタピオカを飲みながら、女性問題についてのお話を伺いました。お話ししてくれたのは、新境界文教基金会のロンさんと彭婉如基金会のワンさんでした。

まず初めにワンさんのお話を伺いました。彭婉如基金会は、男女同権と社会福祉を促進することを目標としているそうです。社会に出るのは男性、家で働くのが女性という現状を変えようと対策を施しています。しかし、台湾の人々の半分以上は昔ながらの考えを持っているため、あまり賛同を得られません。

ワンさんらはこの原因を、中年以上の女性があまり社会に出て働く経験をしたことがないからだと考えています。従って、まずは中年以上の女性に働く機会を与えること、そして同時に子供達に教育すること等の社会福祉をすすめることが、最終的な男女同権に繋がるとのことでした。

続いてのロンさんのお話によると、新境界文教基金会は、彭婉如基金会同様中年以上の女性に働く機会を与えること、そして LGBTQ を含む全ての性別に優しい社会を作ること为目标としています。このためには、今の社会の制度を改革しないとなりません。しかし、改革政策の成果はすぐに目に見えないために民衆からの支持を失ったり、権力を持つ組織が改革に反対したり、フェイクニュースが広まったりと、課題が山積しているそうです。

その後は質疑応答時間でした。

ここでのお話から、日本でも利用できる対策を考えていけたらと思います。



2019 年 3 月 14 日 台湾研修 5 日目(選択制)

阿嬷家（慰安婦記念館）

岡本理沙、渡邊夏希

今日は迪化街にある阿マ家を訪ねました。この施設では、台湾の慰安婦達の苦悩と解放の歴史を学ぶことができます。多くの人がこの問題に対して持つであろうイメージとは裏腹な、お洒落な外装の建物に足を踏み入れ、2階に上がって館員さんのお話を聞きました。

「阿マ」とは中国語で「おばあちゃん」の意で、親しみを込めた慰安婦の呼称です。

慰安婦が生まれた背景には、家庭の貧困、男尊女卑による女性の地位の低さ、の2つがあるそうです。

また、慰安婦がどのように傷を受けたか、というのは

- 1) 生殖能力を失う
- 2) 自分の過去を恥ずかしい、と思う
- 3) 阿マについて、自分の考えを隠そうとする
- 4) 阿マになったことは自分の問題だと考えてしまう

以上の4種類が存在するそうです。慰安婦の苦悩も、単純には解決できないものののだと知り、問題の複雑さを実感しました。

またこの記念館は、政治的カラーにかかわらず、あくまで「人権」の側面に注目するというスタンスで設立された、というお話が印象的でした。世論には「すべての慰安婦は強制的に連行させられた」「強制的であった証拠などない」、「慰安婦に関心がない人は親日」「関心がある人は反日」などという相対する意見が存在しますが、そのどちらのベクトルにも染まらないこの記念館の立場が、両手を引っ張られる人形のイラストで説明されていました。政治的問題には関わらない、という立場のもと、館内に慰安婦像は設置しなかったそうです。慰安婦運動の歴史についても解説していただきましたが、その中で印象的だったのが、日本・韓国・フィリピン3国で国際的な集会を開いた際に、「民間による」裁判を行い、「問題の責任を天皇に求める」といった、センセーショナルな「判決」が出た、ということです。政府レベルで問題解決への道が進んで

いく中で、このように民間レベルでも活発な議論がなされていることを実感しました。

阿マについての説明を伺った後は、学生による質問時間が設けられました。組織や建物についての質問では、来訪者の大部分は政治的意図よりも歴史に関心を持って阿マの家を訪れていること、職員は女性が大半で女性の権利向上と平和のために活動していること、フィリピンや韓国で同様の意図を持って慰安婦問題を扱っている団体とも交流はあるものの、団結して活動するほどではないということ、などを伺いました。また、慰安婦問題のユネスコ登録に関しては各国の主張が対立し行き詰まりとなっている現状を知り、Taipei

Women's Rescue Foundation の掲げる理想がある一方で、政治的な側面を抜きにこの問題を扱うことが困難であるということを感じ知らされる形となりました。

館内は阿マ達の描いた絵や詩、芸術的なお面に彩られており、中庭のカフェでは訪れた人々が思い思いに静かなひと時を楽しんでいます。同時に公開されていたアンネフランクに関する展示を眺めながら、私たちは女性たちの受けた辱めと苦しみの過去に思いを巡らせました。建物は阿マたちの傷を癒すという目的で建設されましたが、過去を知る者たちが世を去って行く中で、将来に渡って記憶を残し続けて行くでしょう。



2019年3月14日 台湾研修5日目(選択制)

3月14日 栖木ひかりさんの街歩き

助田一晟、三富まい

心地良い天気であった3/14の午後、台湾在住の日本人作家栖木ひかりさんに台北市内温州街附近の街案内をしていただいた。単なる街案内ではなく、「ブラヒカリ」と題し、地形や歴史に着目した視点について紹介してくださった。

台湾大学の向かいに集合し、まずは周辺に多く集積する書店を回った。かつて戒厳令の下で言論が抑圧されていた時代に、教育レベルの高い人々が集まる台湾大学周辺では秘密裏に出版を行う地下出版が行われていたため現在でも書店の集積が見られる。明目書店ではかつて出版物をトラックでダンボールに入れて輸送し販売していた名残で今でも本がダンボールに入れられているそう。書店ごとに扱っている本の特性が異なり、中には台湾に関するものなら本に限らずDVDやTシャツなどを扱う書店もあった(台湾店)。また近年では経営を安定させるためカフェを併設する書店も増えてきているという(欒樹下書店、女書店fembook...女巫店というレズビアンカフェを併設)。

また街歩きを行ったのは台北市内に水を供給する水源地から水路が引かれている地域である。現在では多くが暗渠化されている水路だが、台湾の歴史の重層性を知る手がかりともなる(後述)。さらに暗渠化されておらず水路が見えるY字路では住民の方々の工夫によりビオトープのように整備されていた。このように台湾では日本と比べて、空間におけるパブリックとプライベートの境目が曖昧であり、さらなる可能性が広がるとひかりさんは考えているようだ。

さらに、同地域には日本統治時代の建造物が多く残されていた。台湾帝国大学の教授などの居住地とされることも多かったが、のちの台湾大学の教授が居住するようになり、今でも住まわれている方もいるという。他にも元日本人学校と言った施設も見られ、民間によるリノベーションが進んでいた(後述)。

以下に解説いただいた内容の一部と私たちが感じたことを施設ごとに紹介する。

●唐山書店

<写真>

地下に続く狭い階段を抜けると、そこには一面に広がる本の世界があった。目

についたのは哲学の本、何とも言えない誘惑に駆られ手を伸ばしたその瞬間であった。「時間がないので興味がある方はまた今度自分で来てみてください〜い」

● 用水路跡とY字路<写真>

過去使われていた用水路が埋められた跡。ひかりさん曰く、用水路から過去の道の姿に思いを馳せることができる。特に感銘を受けた点を以下に書き残したいと思う。

- ・Y字路を見つけるとその由来を考えるべし。
- ・「使わなくなった用水路を暗渠化(埋め立てて道とすること)し、側の道路と繋げた」という成り立ちが読み取れる。
- ・資料等から過去の用水路の所在を明らかにし地図などに収めようとする試みには、実は政治的な意図が込められている。台湾には大きくわけて統治以前・日本統治時代・国民党一強の時代、と3つのフェーズがあるが、近年の日本統治時代の頃使われていた用水路を明らかにするという行動は、反国民党の立場として「日本統治時代が存在した」という歴史事実を強調する側面がある。

● 台北の日本人学校

日本統治時代の古い建物を、屋根などの外観はそのまま中身をリフォームして活用している施設が、台湾では比較的多く見られる。一例としてはこの学校だ。これとは対照的に、日本の民間企業は古いものは壊してなくし、新しい建造物を建てるといったケースが多い。個人的な見解だが、民間企業にとってはコストパフォーマンスを考えると後者の方が好ましいからではないだろうか。それだけ台湾の民間企業は、維持費や修理費などの損失を厭わず、古き良き建物を保全しようという意識があるのだろう。栖木さんの個人的な意見としては、台湾を見習って日本も旧建造物を残していく方が好ましいそうである。

全体を通して、用水路の埋立地や跡地にとどまらず、今なお残されている用水路のごく一部(淵など)やY字路などからさえも、日本統治時代やそれ以前の市内の道の姿に思いを巡らせることもできると学んだ。これは台湾の歴史や、Y字路の成り立ちを知っていてこそ可能になる見方ではないか。無知の人間には気づけない、ある意味隠された手がかりたちと言えるだろうか。

栖木ひかりさんのおっしゃっていたように、日本のように整備がきっちりし

すぎず、混沌としつつも優しさが感じられる台北の街並み。ただ歩くだけでなく、過去の街並みを意識して歩くという視点を教えていただいた午後であった。



2019 年 3 月 15 日 台湾研修 6 日目(選択制)

日本の新聞記者との懇談会

三富まい、渡邊夏希

3 月 14 日夜は九州大学の企画にお邪魔し、読売新聞の台湾支局の牧野田さんのお話を伺いました。牧野田さんはこれまで北京に 3 年、瀋陽に 1 年、台湾に 2 年に駐在してきたそうです。まず、3 月 5 日に開幕した全国人民代表大会(全人代)の取材での印象をもとに台中関係についてのお話がありました。以降は、学生たちからの質問をベースとして台湾や新聞記者に関する様々な興味深いエピソードを聞くことができました。

牧野田さんは、「誰もが自分の思ったことを表明できること」を理想と考えていらっしゃいますが、今回の全人代は「楽しい」ものではなくなっておっしゃっていました。最近では、言論に関わらず、ゲームコンテンツが共産党系のメディアによって批判されたことにより制作会社の株価の急落があったという事例もありました。台湾への風当たりも強くなっており、台湾内で 2 つの政党が争っていることで大きな脅威を見逃しているようにも感じられたそうです。



また、台湾では言論の自由が非常に重視されているため、強いプロパガンダを含む活動であっても禁止されない状況にあります。そこで喧伝される思想に反対する人の中にはこのような表現を禁じるよう主張する人もいますが、実際に禁止には至っていません。アメリカでは中国のメディアをロビー活動として認める動きがありましたが、台湾での言論の自由を重用する風潮は台湾でのこ

うした動きをけん制するために利用されえます。台湾のメディアについては、新聞やテレビそれぞれの政治的立場が明らかであるとのお話がありました。しかし、このような状況は必ずしも昔から続いていたものではなく、中国によるメディア買収からそのような色が濃くなっていったそうです。

次の学生たちによる質問時間では、記者としての生活から台湾の政治に関わる話まで、様々な話題が出ました。特にナショナリズムに関するお話では、台湾の若者たちが「天然独」と呼ばれ、生まれたときから独立と民主主義を当たり前のものとする新しい世代とされているそうです。近年では経済発展を続ける中国の様子から、自らを「台湾人であり中国人でもある」とする若者も増えているそうです。一方で、台湾の若者が政治の話をすることは日本と同じようにあまりなく、むしろ避けられる話題であることも知りました。政党の主張に関しては牧野田さんも中国との関係に目を向けると懸念が残ると仰っており、メディアで最先端の情報に触れている方のお話として大変興味深かったです。

最後に、情報との関わり方に関する話題では、様々な機関が出している情報に目を向けるべきであるという話が出ました。新聞・ニュースなど、一つの事実に関しても主張によって伝え方は大きく異なって来ます。牧野田さんは食事会の場で内モンゴルの村を訪れた際に警察に引き止められたエピソードを紹介して下さいましたが、そのような苦労もありながら記者の方々が集めた情報に、より真摯に向き合いたいと感じました。台湾のことでなくメディアのお話なども聞け、その後の食事会も含め大変充実した懇談会となりました。



2019 年 3 月 15 日 台湾研修 6 日目(選択制)

緑色行動連盟

川瀬翔子、蔡毓婷

緑色行動連盟は反原子力発電所の運動を行う民間団体で 1994 年に設立されました。2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災までは、原子力発電所に関する活動は政党のマニフェストの一部にすぎませんでした。大震災後は全国的な活動として広まりました。運動が最も活発化した 2013 年には 22 万人が反原子力発電所のデモに参加し、国民にとって反原子力の機運が最も高くなりました。

現在台湾では都市部の近くに原子力発電所が 2 台稼働しており、いずれも日本の福島第一原子力発電所より安全性が低いとされていたため、福島第一原子力発電所の事故が国民に与えた衝撃は非常に大きなものでした。また、都市部で原子力発電所の事故が起きた場合、福島第一原子力発電所事故よりもさらに大きな混乱が予想されます。



しかし東日本大震災から8年がたった今、台湾の人々の原子力発電所に対する反感は薄まってきているようです。原子力発電所を引き続き稼働するかを問う国民投票では、稼働すると答えた人が半数を超えました。原子力発電所がもつリスクにもかかわらず台湾の人々が原子力発電に強くは反対しない理由として、SNSの影響があげられます。近年SNSや著名なYouTuberが核の被害を過小評価するコンテンツを配信しており、ネット上では原発賛成派が主流となっています。緑色行動連盟によると、原子力発電所を引き続き稼働するかを問う国民投票ではSNSを使い切れていなかったそうです。2020年に控える大統領選に向けて、芸能人・有名人と連携する、カフェや書店で原発について意見交換会・勉強会を開催する、などといった活動を行っていき、国民の支持を得たいと話していました。

また、近年ではフェイクニュースが問題になっています。例えば、原発賛成派は「太陽光発電パネルは使用後処理する際に環境にとっても有害な廃棄物となる」などとネット上に書き込むことがあるそうです。これは全く事実無根な情報ですが、仮に緑色公民行動連盟が反論した場合、原発賛成派は「彼らは原発に反対しているのだから、原発の代替エネルギーとなり得る太陽光発電についての悪い噂は否定するに決まっている」と歯牙にもかけないであろうことが予想されます。そこで、再生可能エネルギーの会社と提携し、彼らに太陽光発電パネルは安全だということを発信してもらうことで、フェイクニュースに対抗していきたいということでした。

原発を稼働させるにあたって、発生する核廃棄物の処理も問題です。現在台湾では、汚染が激しい廃棄物は原発の近くで処理していますが、それ以外の比較的汚染度が低い核廃棄物は蘭という島に送られているそうです。しかし島は海からの潮風がきつく、核廃棄物を保存しているドラム缶が腐敗を始めているほか、処理場の貸借期限も切れており、適正な核廃棄物の管理と処理場の確保が急務です。しかし、緑色公民行動連盟がおこなったアンケート調査によると、国民の80%以上は自分たちの暮らす地域に核廃棄物処理場が作られるのは困ると回答しており、原発はあってもよいけれども廃棄物処理場は嫌だという心理がうかがえます。日本でも同様に、誰かの犠牲の上に自分たちの便利で安全な生活が担保されているという事例はいくつも考えることができます。このような現実があるということを忘れてはならないと感じました。

原子力発電所が台湾に非常に多くあることを初めて知りました。それと同時

に SNS の力が国民投票に影響した話を聞いて、国民の大衆を左右する新メディア
マスメディアの影響力の大きさを改めて再認識しました。今後、政治界に限ら
ず様々な世界で、マスメディアを使ってより多くの人はどう関心を持ってもら
うのか工夫を凝らすことが必要になります。緑色行動連盟でのお話は、どうや
ったら人の心を動かせるかということについて考えるきっかけになりました。



2019 年 3 月 15 日 台湾研修 6 日目(選択制)

中華基督教救助協會

川瀬翔子、田尻夏希

自由フィールドワーク 2 日目は社團法人中華基督教救助協會を訪問し、張怡玖さん、王騰仁さんにお話を伺った。これは一口に言うとキリスト教のボランティア団体であり、コミュニティの人々に神の愛を伝えることを目的としている。1998 年に物資の供給や支援の掃除など災害支援を行うために設立された当時は、このような活動をしているのは仏教団体が中心だったという。それから間もなく発生した 1999 年 9 月の台中地震など災害時の支援、そして孤児やシングルマザーの家庭など生活に困窮している人への支援を行なっている。この活動の特徴として、サービスを直接提供せず種々の機関を通して支援を行う点が挙げられるそうだ。現在は 1919 のサービスとして、支援金・子供の学習支援・高齢者のケア・食物銀行の 4 つがあり、以下順にお話をいただいた。

まず、支援金（急難救助金方案）について。この支援金は重大災害時と一般の支援金の二種類に分かれており、個人の寄付金を財源としている。重大災害時と異なり一般の保険には、金額の上限や非キリスト教徒の優先、病気や事故による困窮家庭が対象などの特徴がある。

次に、学習支援（國小課後陪讀方案）についてお伺いした。これは、学習支援よりも、そばにいたり命の大切さを伝えることを目的としている点で一般的な塾とは異なっている。対象となるには、生徒は政府とこの協會が発行した、経済的に困窮していることを示す証明書が必要となる。しかし実際には、本人は貧しくてもその人の名義で不動産を使用していると名義を使われた人が存在する。このような場合は学校の先生を通じて証明書を請求することもあるそうだ。この学習支援活動では、小学生は週に 4 回・中学生は週に 3 回、教会で一緒に宿題をしている。また、毎月数回の屋外での活動や芸術など人格教育をしたり、子ども一人につき 1200 元を提供したり家庭訪問や電話訪問など子供たちの家族を助ける活動も行なっている。ここでは、後述のフォードバンクとも連携した昼食・夕食の提供をも行なっており、日本の「子ども食堂」と似ている印象を受けた。



高齢者支援（1919 旺得福高年者服務方案）についてはまず、台湾の高齢化に関する説明を受けた。台湾では 2045 年には老年人口が 14 歳以下の児童人口を上回り超高齢社会に突入するとされている。その高齢化の速度は世界で日本に次ぐ第 2 位であり、特に中南部に仕事や教育機関を求める若者の流出によって高齢化が進む地域が集中しているそうだ。また、高齢者に関する国家支出の 80% は、寝たきりなど一人で暮らせない高齢者の支援に用いられている。また、台湾ではデイケアなどのサービスは大都市ではあっても台湾全体としては少なく、公的サービスを受けるにしても時間や程度などの制限が厳しい。介護やそれに関する支出といった家族の負担を減らし健康寿命を延ばすことで、家族ないし政府の負担を軽減することが現在の政策の方向性である。ここで、この協会が進めている旺得福俱樂部に注目したい。これは健康の維持・増進と他者への交流を重視しており、高齢者が集まって交流やレクリエーションを行っている。実際、最初は車椅子だったおばあさんが活動が続けているうちに立ってスポーツをできるようになった例があるそうだ。

続いて、食物銀行の取り組みについてお話を伺った。こちらは 2010 年 10 月に設立され、「社会の底辺にいる、政府の手が届かない経済的弱者」を対象として、食料品・生活必需品の支援を行っている。具体的には、① 2 か月ごとに食料バッグを送る、② フードバンクを運営する、③ 台中において余剰食物を資源として再利用する、という主に 3 つの活動がある。

食物銀行は、再分配・価値の再発見・再利用を「3R」として提唱している。それぞれ、

再分配	・2 か月に1 度、食料バッグを送る。 ・8 か所あるフードバンクを運営する（←量販店、コンビニ、スーパー、飲食店などから賞味期限が近い商品などを寄付してもらっているという）。
価値の再発見	・家庭やスーパーなどで余っている食材を使って料理を作り、必要な人々に提供する。 ・トラックを改造して移動キッチンカーを作り、同様の活動を行う。
再利用	・野菜・果物の皮や骨などの生ごみを、細菌を用いて分解して肥料として再活用する。

のようになっている。

他にも、企業の社会奉仕活動の一環として、社員がボランティアで米の包装（もちろんその企業のデザインしたものを使ってよい）を行い、それを必要とする人に配布する、包米志工活動もある。また、キリスト教系、非キリスト教系含めほかの食物銀行との交流も盛んで、2018 年には全国食物銀行研究会が行われた。例えばキャベツの過剰生産が起こったときに食物銀行の連盟を通じて迅速に分配が行われるなど、非常に効率的な連絡システムが出来上がっているという。

台湾で3本の指に入る大きな食物銀行だそうだが、毎年1億2000万台湾ドルの物資またはお金による寄付を受けている。寄付の内訳は起業家からのものが20%ほど、個人からの寄付が70%ほどであり、大部分は非キリスト教信者によるという。（ちなみに、台北のキリスト教信者の人口に占める割合は4%ほどだという）。

フードバンクを運営する際に忘れてはならないのは、食べ物を必要な地域に分配する際に輸送費がかかっているということである。こちらのフードバンクでは年間数百万台湾ドルほどが必要だといい、政府からも少し補助金が出るそう。

台湾では、日本に比べてフードバンクの知名度が高いように感じた。他の商店に交じって町中に食物銀行が存在したり、必要な人が食べ物を取っていくことができる冷蔵庫が多く地域で導入され始めていたり。日本では、世間体を気にする国民性も相まってか、フードバンクを訪れること自体を恥ずかしいと感じてしまう傾向がありそう。しかし、政府の福祉の網からもれてしまう家庭が存在することも事実であり、今後ますますフードバンクの普及が求められていくだろう。台湾での活動も参考に、みんなが空腹を抱えずにすむ社会を目

指していくべきだと感じた。



2019 年 3 月 15 日 台湾研修 6 日目(選択制)

龍応台基金会

森本拓歩、蔡毓婷

龍応台基金会は、著名な作家龍応台さんが、台湾の若者の視野を広くし、胸筋を開き、世界市民の育成を目的にヨーロッパでの議論等に学生を参加させたり、学生のサロンの場を設けたりする基金会です。基金会の資金は龍応台さんの友人からの寄付により成り立っています。

本研修では東大、九大の学生と龍応台基金会の台湾の学生が交流を行いました。主に将来に対する懸念や気候変動・環境問題に関するディスカッション、経済の停滞による少子化、そして様々な社会問題についてどう考えるかを話し合いました。まず台湾の学生が言及した将来に対する不安に以下の 2 点がありました。

- ・家賃が高いため、首都圏での生活は大変、技術の進歩は速い
- ・台湾の空気汚染 北京と同じようにひどい

これらに関して生活環境、経済の改善が第一で、第二が技術に対する理解が必要だという意見がありました。

台湾と日本に共通していた将来に対する不安は、

- ・気候変動の影響；激しい台風が続いたことに温暖化の影響を感じている

これに関連して、

- ・東京ではヒートアイランド現象が起こっている一方で、台湾では都市の緑化が進んでいる

異常気象に関して、近年じかに影響を感じているのは台湾も日本も共通であり、それらの異常気象は地球温暖化に対する焦燥感を若者に感じさせているように見えました。ただし、環境問題への対策に関しては、台湾の方が日本よりも一歩抜きん出ているように感じました。



社会問題については晩婚化や、高齢化、孤独死、同成婚などについて話し合い、いずれも議論が白熱しました。

台湾では日本の社会問題が 10 年遅れで台湾にも起こるという考え方があり、日本が現在起こっている社会問題にどのように対処しているのか非常に興味がある様子でした。日本の学生としても、台湾で現在起こっていることは日本で起きていることと共通していることが多くあるため、台湾が社会問題にどう対処しているのか非常に興味がありました。実際の議論の時間は非常に短かったですが、お互いに新しい気付きがたくさんあり、非常に有意義でした。台湾の学生と社会問題について考えることでお互いに刺激を与えあい、自分たちの国の将来、さらには世界の将来を考え直すいい機会になりました。



2019 年 3 月 15 日 台湾研修 6 日目(選択制)

遠景基金会

戴越、宇野瑛理香

遠景基金会とは何か。ホームページを見ると objective は下記の通りだった。

Conduct high quality, independent research tackling major hotspot issues in international politics and global economy as well as security and strategic challenges ; then base on such research to provide concrete and practical policy recommendations for the government.

Strengthen and consolidate the Foundation's role as an exchange platform among think-tanks, industry and governments and seek to shape policy choices and strategies of the administration as the nation's leading think-tank.

Provide consultative advices while entrusted with special research projects from the government and private sectors.



私たちはこの組織の president である I chung Lai さんと奥さんの劉さんをお迎えして、それぞれ台湾の政治状態、邱永漢の人生についてのお話を聞いた。最初に渡された introduction of controversy of taiwan's international status というプリントでは、中国共産党、台湾政府旧与党の KMT、台湾政府現与党の DPP のそれぞれの見解などの比較していた。また、それを踏まえて、他の国々は台

湾に対してどういう公式の認識をしているのかを細かく分析していった。最後に、台湾ではまだ独立か否かに関する諸問題は解決しておらず、また、強大化する中華人民共和国による。間接的、直接的な圧力が強まっていることが説明された。

その後、「自由への道は残酷な道」という題で劉夏如さんから話を伺いました。劉さんは日本でも著名な直木賞受賞作家である邱英漢についてお話しになりました。邱英漢は、作家であるとともに経済評論家でもあり、「お金もうけの神さま」「株の天才」と言われるような逸材でした。昭和17年に東京大学に入学し、卒業後台湾へ帰りました。しかしその頃台湾では戒厳令が敷かれており、規制は大変厳しいものでした。邱英漢は香港へ亡命し、それを元に後に小説「香港」を執筆し、見事直木賞を受賞します。邱英漢は、人間はどう生きればいいのかということを生涯作品のテーマとして掲げていました。最後は今の世界情勢を予言するかのような、「これから、アジアの国々は酷い目にあう。大変な事になるだろう。でも、それも面白いね。」という邱英漢のセリフで締めくくられた。

その後は質疑応答時間だった。

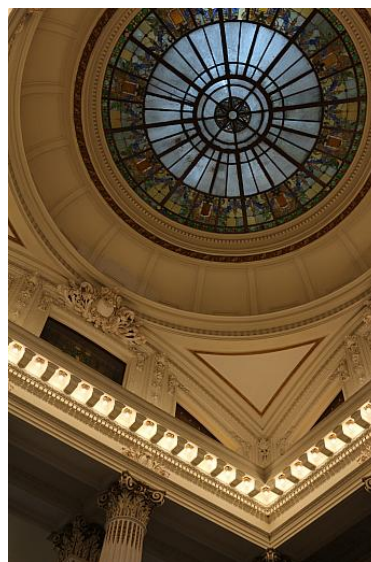


2019年3月15日 台湾研修6日目(選択制)

国立台湾博物館

助田一晟、三谷怜司

国立台湾博物館は日本統治時代に作られた博物館のひとつ。台北駅に程近い二二八和平公園の中にあり、アイボリーのルネッサンス時期のギリシアドリス様式の建物が目を引く台湾で最も歴史のある博物館である。国立台湾博物館の歴史は日本統治時代の1908年に設立された「台湾総督府博物館」までさかのぼることができる。同年に基隆と高雄を結ぶ縦貫線が全線開通したことを記念して開館され、台湾という土地そのものや、日本による統治でもたらされた近代化の成果を紹介する場でもあった。以下に博物館の様子と博物館内のステンドグラスのドームの写真を載せておく。



台湾の歴史、民族、地質、鉱物などに関する展示があり、別館には恐竜の展示なども用意されている。台湾をもっと知りたいという時、二二八公園へ散歩にいくついでにちょうどいい場所だ。

当博物館は日本統治時代に作られ、日本統治時代は台湾の植民地化を正当化する手段として建設された。ヴィッカーズ先生は民主化前にもこの博物館に訪れており、民主化前と今ではまったく違う建物になっているとおっしゃった。やはり民主化前は日本を切り捨てる傾向が強かったため、建物の管理はひどく

ずさんであった。それが今はリノベーションを経てとてもきれいになっているのを見て先生は大きく驚いたそうだ。

日本が嫌いなら蒋介石率いる国民党はどうして日本が作った建物を破壊して新たに作り直さなかったのか？という質問があり、ヴィッカーズ先生に答えていただいた。

これは一概には答えられないが、ひとつに当時の政府が資金調達に困っていたことから新たにビルを建設するほどの財政力がなかったことがあげられる。しかし、当時の政府は展示物の一部を隠したりして日本統治時代の痕跡をなくそうとしたことはある。

展示にはパイワン族を主に原住民の生活、生物、動物の様子、微生物の様子、恐竜の様子など幅広い内容の展示物が用意されていた。自分は台湾民族原住民の調査を行なった日本の学者の展示に興味を持った。日本から来た学者は九州出身が多く、九州大学の著名な教授も多かったそう。当時の学者は台湾全島をまわり、各原住民族と積極的にコミュニケーションをとりながら調査をしたそう。当時の一部の原住民族には首をとる文化などもまだ残っていたため、そのような環境の中で彼らの信頼を得て調査を行なったことは根気を必要とする作業だった。

博物館の別館にはカフェもあり、見学後にはくつろぐこともできる。恐竜の展示を見ながら、私たちはコーヒーを飲み交流を楽しんだ。